

平成 22 年 5 月 26 日現在

研究種目：特定領域研究
 研究期間：2005～2009
 課題番号：17083022
 研究課題名（和文）「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成」
 調整班C01：文化交流研究部門
 研究課題名（英文） Coordinating Group of Cultural Exchange Research Section C01

研究代表者
 井手 誠之輔（IDE SEINOSUKE）
 九州大学大学院人文科学研究院・教授
 研究者番号：30168330

研究成果の概要（和文）：文化交流研究部門調整班は、専門分野の枠を超えた共同研究と相互討論によって、東アジア海域における文化交流の全体像を、多面的アプローチによって検討する枠組みを構築するために、本調整班を、寧波との海域交流の窓口となってきた博多に所在する九州大学に置き、相手先の寧波から窓口となる博多及び九州各地の港町を中心として行われた文化交流を具体的に明らかにする観点とともに、日中間の交流を相対化し、多角的な海域文化交流の実態のなかで寧波のハブとしての機能を考察すべく、朝鮮の地勢のかつ文化的位置についても重点をおき、さまざまな研究活動を実践した。

研究成果の概要（英文）：This coordinating Group of Cultural Exchange Research Section has kept the base at the Kyushu University locating at the Hakata, where has been the counter part of Ningbo in the maritime trade between China and Japan, also has been the opened window to Korea. As well as the multiple-faceted topological functions, we tried to clear cultural exchange between both port cities among Ningbo and Hakata, and functions of Ningbo as cultural Hub in the historical, cultural and geographical perspective of East Asian maritime area including a relative viewpoint from Korea.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	900,000	0	900,000
2006年度	1,800,000	0	1,800,000
2007年度	1,800,000	0	1,800,000
2008年度	1,800,000	0	1,800,000
2009年度	1,800,000	0	1,800,000
総計	8,100,000	0	8,100,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・史学一般

キーワード：寧波、文化交流、博多、朝鮮、海域交流、東アジア

1. 研究開始当初の背景

東アジア海域の文化交流史については、すでに史学・文学・思想・宗教・美術・建築など、各方面からの膨大な研究の蓄積がある一方で、領域横断的な議論に乏しく、個々の専門性がかえって障害となっていた感もあった。日本には、すでに中国で失われたさまざまな文化遺産が伝存しており、これらの資料に

ついて専門領域を超える議論をとおして有効な中国研究の資料として積極的に活用するとともに、日本における中国文化の受容の諸相を明確にする必要性があった。

2. 研究の目的

専門分野の枠を超えた研究者の共同研究と相互討論によって、東アジア海域世界におけ

る交流の全体像を、多面的アプローチによって検討しうる枠組みを構築することを目的とする。特に前近代の東アジア海域におけるもっとも重要な海上交流の結節点であった寧波を焦点とし、日本側の海上交流の窓口であった博多と寧波との関係を基軸として検討を進める。さらにやはり東アジア海域の重要な構成要素であった朝鮮半島沿岸、および寧波—博多ルートとならぶ海上の道であった黒潮ルートをも含め、東アジア海域の歴史的展開を包括的に考察する。さらにユーラシア西部のインド洋・地中海海域世界との比較により、東アジア海域史を世界史的視点から把握する可能性を探る。

3. 研究の方法

個別の研究活動とその成果については、各研究班の報告に網羅されているので、ここでは、以下、文化交流研究部門調整班が中心となって行った活動を、(1)研究班間の調整、(2)研究集会の開始・連携、(3)連続講座の開催、(4)研究書等の慣行の項目にわけて記述する。

(1) 研究班間の調整

初年度の平成 17 年度には、九州大学において文化交流調整部門の 12 班全体の研究協議会を開催し、従来の日中文化交流史の視界にとどまらず、朝鮮ルートや沖縄ルートを含めた多角的な視点から、海域交流圏を包摂する中国というシステムについて再検討し、また地中海世界の海域交流圏のシステムとの比較検討を行っていくことを研究方針として確認した。また 5 年間の研究班で行う主要行事について意見の調整をはかった。とくに合同研究会のあり方について、より学際的な参加が求められる形態について議論し、平成 19 年度の夏、静永が中心となって九州大学で特定領域研究全体のワークショップを開催するための構想を練り、実現できたことは大きい。

(2) 研究集会の開始・連携

・国際シンポジウム「寧波の美術から海域交流を考える」の開催

平成 18 年 12 月 16 日、17 日を会期としてオープン間もない九州国立博物館を会場として開催した。この国際シンポジウムは、美術作品を如何に歴史資料として活用するかという観点から、寧波をめぐる美術について、国内外の美術史、歴史、文学の領域を横断する国内外の研究者 18 名が、講演と報告、討論を行った。シンポジウム全体は、「第 1 セッション：入宋僧と寧波文化」と「第 2 セッション：遣明使の視界」という二つのセッションによって構成し、第 1 セッションでは、寧波が明州・慶元府と呼ばれた南宋時代を中

心に、先進的な仏教文化の移入に努めた入宋僧の活動から、当時の文化交流の実際を検討し、第 2 セッションでは、明時代を中心に、寧波を經由して北京を訪問した入明使の視界から、南宋時代とは異なる寧波という場の役割について議論した。本シンポジウムでは、地域社会における学問拠点との連携、モノ資料の多角的な活用法の確立、学術的成果の社会への還元という 3 つの課題を実践するため、1)九州国立博物館との共同主催、2)シンポジウムに関わる文化財の展示、3)一般参会者の募集など、本研究ならではの新しい取り組みを具体的に実現することを企図した。とくに 21 件の展示品をとおして、シンポジウムと関連する美術作品の実物を会期中に観覧できたことは、言説空間とモノ空間との双方をシンポジウムという企画の中で立ち上げ、文化交流におけるモノの役割を具体的に認知する上で、大きな効果が認められた。

・国際ワークショップ「日本における寧波美術の受容」の開催

2009 年 8 月 10 日、京都泉涌寺にて開催。総括班主催の国際シンポジウム「舍利と羅漢」

(8 月 8 日・9 日)に引き続き、同シンポへの海外からの参加者を中心に同シンポジウム及び奈良国立博物館で開催中の「聖地寧波展」から提起される問題点、今後の研究課題などについて研究協議を行い、あわせて関連する寺院で宝物の見学を行った。

コメンテーター

ハオ・シェン (ボストン美術館)、ステファン・アリー (フリーア美術館)、陳韻如 (台北国立故宫博物院)、渡辺雅子 (メトロポリタン美術館)、リチャード・ビノグラード (スタンフォード大学)

司会

井手誠之輔 (九州大学)、ユキオ・リピット (ハーバード大学)

エクスカージョン 清涼寺、大徳寺、泉涌寺

・国際シンポジウム「《域外漢籍》の研究価値を考える」の開催

古典文学班と共催し、2009 年 11 月 14 日、京都同志社大学「寒梅館」を会場に開催。東アジアの「漢籍」をめぐるさまざまな研究の可能性を考え、近年、中国において提唱されはじめた「域外漢籍研究」(中国国外で所蔵・出版された中国典籍)について、その研究状況を紹介していた だくとともに、日本国内で可能な研究活動、更には今後の日本研究者に求められている視点について、活発な討論を行った。

第 1 部「《域外漢籍研究》の定義とその成果」張 伯偉 (南京大学域外漢籍研究所所長) 作為方法的漢籍文化圏

金 程宇 (南京大学) 海印寺雜板本『唐賢詩
範』初探

第2部「日本から見た域外漢籍研究」

蔡 毅 (南山大学) 捕遺輯佚、索隱鈎沈—東
亜漢籍研究的「互補」意義

陳 翀 (九州大学専門研究員) 『集注文選』
の成立過程について

副島 一郎 (同志社大学) 中国文章論の受容
と和文規範意識の形成

陳 捷 (国文学研究資料館) 羅振玉所紹介的
日本漢籍与其研究

第3部「中国古代文学研究と域外漢籍」

張 健 (香港中文大学) 日本詩文評類漢籍与
中国文学批評研究

胡 可先 (浙江大学) 新出唐代詩人墓誌研究

王 水照 (復旦大学) 中国宋代文学研究
的現状与展望

第4部 総合討論

司会：静永 健 (九州大学)

(3) 連続講座の開催

平成19年度、通例で夏に開催されていた大
学院生・若手研究者向けの講座を、正月明け
の休み期間に4日間、九州芸術学会との共催
で開催し、あわせて一般を対象とする公開講
演会、さらに見学会を開催した。なお、この
講座では、テーマを「禅と美術」に絞り、日
本における五山文化創生の問題について協
議することにした。

講座 九州大学文学部会議室

山川 暁 (京都国立博物館研究員) 日本にお
ける初期禅宗と伝法衣

根立研介 (京都大学教授) 「頂相彫刻」と中
世肖像彫刻

島尾 新 (多摩美術大学教授) 詩画軸の世界
—禅僧の文雅—

渡辺雄二 (福岡市美術館研究員) 博多禅と
美術の諸相—雪舟、狩野派との関係をふくめ
て—

公開講演会 福岡市美術館講堂

ヘルムート・ブリンカー (Helmut Brinker チ
ューリッヒ大学名誉教授)

Traces of Death and Rebirth in Medieval Zen
パネル・ディスカッション

司会 井手誠之輔

パネラー 山川暁、根立研介、島尾新、渡辺
雄二、ヘルムート・ブリンカー

見学会

聖福寺、妙楽寺、承天寺、崇福寺、九州国立
博物館「京都五山—禅の文化展」

(4) 研究書の刊行

・『寧波の美術と海域交流』報告書 (2008年
5月)

2006年度に本調整班が中心となって開催し
た国際シンポジウム「寧波の美術から海域交
流を考える」の報告書 (全229頁)

開催主旨 井手誠之輔

第一セッション：入宋僧と寧波文化

井手誠之輔 (九州大学) 寧波をめぐる場と美
術

許孟光 (寧波市文物考古研究所) 「歴史と文
化の都市」寧波の保護と研究

谷口耕生 (奈良国立博物館) 栄西の入宋と東
大寺復興

藤岡穰 (大阪大学) 鎌倉彫刻における宋代美
術の受容

岡元司 (広島大学) 宋代明州の史氏一族と東
錢湖墓群

第一セッション討論

第二セッション：遣明使の視界

石守謙 (台湾、中央研究院) 北京を拒絶する
—雪舟入明時の蘇州画壇—

洪善杓 (韓国、梨花女子大学) 一五・一六世
紀における朝鮮画壇の中国画認識と受容態
度—対明觀の変化を中心に—

伊藤幸司 (山口県立大学) 日明交流と肖像画
賛

畑靖紀 (九州国立博物館) 雪舟の中国絵画に
対する認識をめぐって

張如安 (寧波大学) 明代における寧波と日本
の文化交流

第二セッション討論

なお、本書は、『寧波の美術と海域交流』と
して中国書店から2009年9月に出版された。

・『から船往来』(中国書店、2009年6月)
の刊行

古典文学班の静永が中心となり、日中、日朝
文化交流に焦点をあてた研究書として刊行
した。本調整班は、編集のための調査協力を
行った。

小島毅 卷頭言—関東圏の船、鎌倉と常陸

第一部 船のみえる風景

佐伯弘次 鎮西探題・鎮西管領と東アジア

林土民 寧波沈没船の考古研究

橋口亘 近世薩摩における中国陶磁の流入
—清朝陶磁器を中心に—

第二部 学び舎のむこう

荒木龍太郎 海域の街・長崎—朱舜水と安東
省庵の儒学への想い

中村春作 江戸期儒者の琉球觀—荻生徂徠
の視野の中で—

吉田洋一 福岡藩の医学—亀井南冥を中心
に—

第三部 尽きせぬいのり

静永健 阿弥陀経石の航路

李広志 中国における葬送儀礼—寧波地域
を例として—

陳翀 中国の観音霊場「普陀山」と日本僧慧
萼

第四部 みやびの遺響

坂田進 魏氏明楽—江戸文人音楽の中の中
国—

加藤徹 中国伝来音楽と社会階層—清楽曲「九連環」を例にして
第五部 ほとぼしる言の葉
藪敏祐 奥州胆沢城出土漆紙文書「古文孝経孔氏伝」の伝来について
若木太一 李徳容—善行には報がある話—
勝山稔 支那ニ浸ル人—井上紅梅が描いた日中文化交流
編集後記
静永健 「から船」がつなぐ三つの「くに」へ

4. 研究成果

東アジア海域圏の文化交流について、日中間の具体的な様相を明らかにするとともに、中朝、日朝間の朝鮮半島ルートや、薩摩・琉球等の南海ルートをふくめた全体像のなかで、将来的な海域交流のモデルを構築するという本調整班の目的は、すくなくとも研究領域を超えた議論の場を提供しえたという意味において、その基盤を形成することができた。とくに九州芸術学会や九州史学会など、九州地域を中心とする学会の活動において、シンポジウムや講座等を共催し、積極的に地域の学会内に議論を広げていったことは特筆できる。また美術品を歴史資料として、さらに文化交流の主役の一つとして領域横断的な学問の言説空間に解放し、多領域の研究観点から検討していくために、積極的な展覧会との連携がはかれたことも、今後の学界への一つのモデルとなりうる。

今後は、こうした学際的な研究をさらに深めていく必要性を感じているが、とくに文化財関係では、絵画や彫刻のジャンルにやや偏向した観もあり、考古学や日本史の領域とも連携をつよめ、陶磁資料、書・墨蹟資料、漆藝史資料などについても、広く研究者との協議を深めるのが望ましい。なお、本調整班の枠組を超えて、すでに重点項目が建てられて研究グループが組織されており、本調整班における研究成果の遺漏については、適宜、これらの領域横断的な研究グループの研究成果と補完されることになる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

本研究班は、計画研究班間の調整を行うものであって、単独に研究計画を実施するものではない。したがって、個々の研究成果の公表については、各班の報告を参照願いたい。ここでは、本調整班が中心となってまとめた業績についてのみ報告することとする。

〔図書〕(計3件)

- ① 東アジア美術文化交流会、寧波の美術と海域交流、中国書店、2009年 230頁
- ② 東アジア地域間交流研究会、から船往—日本を育てたひと・ふね・まち・ころ、中国書店、2009年、320頁
- ③ 文化交流研究部門調整班、寧波の美術と海域交流、非売品、2008年、230頁

〔その他〕

ホームページ等

http://www.lit.kyushu-u.ac.jp/aesthe/sympo2006/sympo_index.html

6. 研究組織

(1) 研究代表者

井手誠之輔 (IDE SEINOSUKE)
九州大学・大学院人文科学研究院・教授
研究者番号：30168330

(2) 研究分担者

中島楽章 (NAKAJIMA YOSHIKI)
九州大学・大学院人文科学研究院・准教授
研究者番号：10332850
静永 健 (SHIZUNAGA TAKESHI)
九州大学・大学院人文科学研究院・准教授
研究者番号：30274406
森平雅彦 (MORIHIRA MASAHIKO)
九州大学・大学院人文科学研究院・准教授
研究者番号：50345245

(3) 連携研究者

伊藤幸司 (ITO KOJI)
山口県立大学・国際文化学部・准教授
研究者番号：30364128